



後
 雙
 奇
 談
 奇
 物
 語

特
 3
 遠
 896
 6



門へ遠 13
號 976
卷 6

福相田

後巻 幸物語卷之六

遠島日坂位浪死終客舎 鬼卯著

明治三六年
上月十日
購求

○今より富右衛門姓名に記して款は待佐
目流金子も右也、甲加にひそきて、
あよろる子も全方也、三回忌にあたりけし、
熟しはらん出て討とべしと浪死へ至、
小ありおも知もごまの、おいお生玉、
はらん守むやと船小て長島へ下、
ましまるとねり人、人よもます、

十段

下



夏よ赤松飛江舟八千峯以才後好し播磨へともひの親父の人
 小千峯が貞ん孝んと宣らるるに赤松も大いよ尻
 引る義婦が原るるも汝が幸ありかと合せて飲ん付とど
 んべあぐべぐば汝も彼が飲を付までた控と同しくせととれ
 まうと義士おりの後継の后嫁ら成たのそ改めて親をよし
 系於お守おへい痛手といひ立志ぐくく播磨へ引とり
 まぬ身とやつく飲をぬらふべしと家老成系於へきし
 唇は舟の隅首尾より付いくとたま帰悦こびまうく大坂の
 養屋舗へまらやうとを何ぐよ飲の泉加瑞小ありと何の

きてお父お監が菴よ近けまの号より毎成りて飲とるぬ
 べし去まぐう後同の里までい供人成る連んとありまは留ち
 居役罷まり大坂中く鳴より後同の里とい先接箱養屋
 立傘行列者うよ千峯の旗系あよ赤系侍女數十人して
 お監ご宅へ来る侍白うの帝九つ時又速ひよ来るべしと
 ぬしおお監お面會し飛江舟どの号成ひとら飲る右集増
 迫迫に居と居うよ赤系のお者出い来るり赤く夫婦の
 大皆供より石連ての中く午とと逐るる時ぐし赤系放
 おありし時相者トして君いおの相やりますとひしめて思ひ

幸物言書卷之六



三才言卷之六

こまはつてはけ懸いんお監は法方のやうを成す合人とあめし
 合し。このまゝし助板の巻は帝及まぬ。表の東京よ出て
 やうと成何ぐよいつもあやしと人よとへ進ねの尻らに
 たまひたる。八月十五日。行田も名月成標し。二千里の所
 人のんと待たる成教よ板をまとも一ん張らる。助板子
 ころ。賢昏小及へども。まともい人も進ず。巻は帝どのまぬ
 と待たる交代せんと。お京よ撥らる。お月成極居らるに。
 巻は帝どの千歳も。例の乞児の形を出来り。まゝし助若方
 成ねざらる。お京よたまへと千歳法とも勤むまとも。お目

成成らる。おまはつてはけ懸いんお監は法方のやうを成す合人とあめし
 合し。このまゝし助板の巻は帝及まぬ。表の東京よ出て
 やうと成何ぐよいつもあやしと人よとへ進ねの尻らに
 たまひたる。八月十五日。行田も名月成標し。二千里の所
 人のんと待たる成教よ板をまとも一ん張らる。助板子
 ころ。賢昏小及へども。まともい人も進ず。巻は帝どのまぬ
 と待たる交代せんと。お京よ撥らる。お月成極居らるに。
 巻は帝どの千歳も。例の乞児の形を出来り。まゝし助若方
 成ねざらる。お京よたまへと千歳法とも勤むまとも。お目

遠易日辰

栗枝亭鬼卯編述



東武画狂人

先北齋先生正流

葛飾北明圖画



攝州

執筆

淺野高造書

皇都

刷人

井上治兵衛刀

文政二年

巳卯孟春癸行

平安京極通四條上八町

九屋善兵衛

書林

江戸日本橋新右衛門町

前川六左衛門

梓

山中瑞錦堂繪本目錄

京都三條通寺町西八町

九屋善兵衛

繪本雪鏡談

十冊

繪本魚一話

十冊

羽衣物語

六冊

繪本顯勇錄

十冊

保元平治物語

十冊

日本迴國勲徽記

五冊

彦山靈驗記

十冊

聖德太子傳

六冊

於楠桑助高山鎮復雙言

四冊

金毘羅神靈記

十冊

小栗外傳

十冊

八百屋姦胡蝶夢

五冊

繪本金花談

十冊

自來也物語

十冊

於初德齋窓螢餘譚

六冊

二寫英勇記

十冊

小野小町一代記

六冊

於半長齋月桂新話

十冊

淺草靈驗記

十冊

双蝶之白糸及紙

五冊

於三慶齋宗像曆

七冊

繪本合邦出

十冊

繪本鉢冠譚

七冊

繪本尾形物語

六冊

繪本物草太郎

十冊

繪本車物語

六冊

會替三浦卷

六冊

繪本孝感傳

十冊

紙屋猪生談

五冊

尼城錦

五冊

小野篁八十嶋影

十冊

再栄花川談

四冊

